

説教「十二弟子を選ぶ」(マルコ3:13-19)

今日の聖書の個所は、イエスさまがこれと思う人々を御自分のもとに呼び寄せて、特別に十二人を選び、使徒として任命なさったことが語られています。このイエスさまによる十二使徒の選びは、前回読みました湖の岸で、イエスさまが各地から集まって来た多くの病人を癒し、汚れた霊を追い出した出来事のあと続いてなされたものとなっています。その時、イエスさまを押し潰さんばかりに、病気に悩むおびたしい数の群衆が押し寄せて来たため、イエスさまは小舟に乗り込み、漕ぎ出すと、岸から少し離れたところで、岸辺に集まっている人々に神の国の福音を告げ知らせたのです。そうしてイエスさまは群衆が求めるからだの癒し以上のものを、彼らに与えようとなさったのです。それは、神さまの愛を受け入れ、罪を赦され、どのようなときも神さまと共に生きるという、神さまとの正しい関係のことで、神さまから遣わされたメシアであるイエスさまだけが与えることができるものです。

神の国の福音について語ったあと、イエスさまはおびたしい数の病人たちを癒されました。中には、汚れた霊に、悪霊に取りつかれた人々がいて、イエスさまを見ると、彼らはひれ伏して「あなたは神の子だ」と叫び、騒ぎ出しました。悪霊どもは、神の子であるイエスさまが来られたことによって自分たちの支配が終わったことを悟り、最後の抵抗をしたのです。ここで悪霊どもは、間違ったことを言っていない。イエスさまは神の子である、ということは嘘偽りない真実であるからです。このことを、その場にいただれよりも悪霊どもの方が正しく知っていたのです。しかし、イエスさまは、悪霊どもに、自分のことを言いふらさないようにと命じ、厳しく戒められます。イエスさまはご自身を証しするのに、悪霊どもの力など必要となさらないのです。また悪霊どもの叫びは、イエスさまへの信仰を告白するものではなかったのです。むしろ悪霊どもは、そう叫ぶことで、未熟な大勢の人々を惑わし、またイエスさまに十字架の道を回避させ、安易なメシアの道を進ませようと誘惑し、イエスさまの宣教を邪魔しようとしたのです。だから、イエスさまは、悪霊どもを黙らせ、彼らがイエスさまのことを証言することをお許しにならなかったのです。そして悪霊ども黙らせたあと、イエスさまはご自分のことを証しするものとして、宣べ伝えるものとして弟子たちの中から、これという人を呼び寄せ、十二人を選び、使徒として任命なさったのです。

それが、今日の聖書の個所に記されていることです。13節には、イエスさまが「山に登った」とあります。前回、イエスさまは湖のほとりに居られましたが、ここでは山に登られています。山といっても、高い山のことではなく、ガリラヤ湖周辺の地形のことを考えると、それは小高い丘であったと思われます。イエスさまが山に登ったのには、意味があります。それ

はイエスさまが父なる神さまとの交わり、祈りの時を持ったという意味です。しかもイエスさまは大事な決断をする時、また大事な場面場面で、弟子たちからも離れて一人、山に登って夜中祈られることがありました。この時も、イエスさまは十二人を選び、使徒として任命するにあたって、山に登られ、父なる神さまと語り合い、祈りの時を持たれたのです。並行するルカによる福音書には「イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた」（6：12）とはっきり書いています。イエスさまは、一晩中神さまに祈られた後、朝になって、弟子たちの中でこれと思う人々を呼び寄せたのです。

イエスさまは、一晩中祈って、これと思う人々を選ばれました。わたしたちが今、イエスさまによって教会へと招かれ、教会の礼拝につながる者とされているのもそうです。わたしたちの決断と行動よりも先に、このようなイエスさまの祈りがあり、イエスさまの選びと招きがあるのです。しかし、選ばれていると聞くと、わたしたちの頭にすぐ思い浮かぶのは、どんな理由で、どういう基準で選ばれたのか、ということであり、また選ばれなかった者はどうなるのか、ということです。しかし、そのことは、いくら考えても、わたしたちには分からないことなのです。イエスさまが、神さまとの祈りの交わりの中で「これと思う人」を選んだのであり、ただ神さまだけ、イエスさまだけが、そのことをご存じなのです。教会へ招かれ、礼拝につながっているわたしたちが、なぜ選ばれたのか、どういう基準で選ばれているのか分かりません。ただ言えることは、神さまの、イエスさまの御心によって選ばれている、ということだけです。しかし、選びがわたしたち人間の側に左右されず、その根拠を持たないということ、ただ神さまの御心によるということほど、確かであり、信頼できるものはないのです。

選びの理由、その根拠については、わたしたち人間には分からないのですが、それがどのようなものかについては、イエスさまが選んだ十二人の面々を見ると見えてきます。彼らは、何か特別な資質や能力があったとか、他の人よりも知恵があった人々ではありません。実に種々雑多な人々の集まりであり、何かしらまとまりがあったわけでもないのです。ただ一つだけ、唯一の共通点は、イエスさまが一人ひとりを祈って選び、招いて、ある目的のために集められたということだけです。それはまたそっくりそのまま、教会に、わたしたちにも当てはまります。16節以下には十二人の名前が列挙されています。イエスさまの弟子となる前の職業や経歴で言えば、シモン・ペトロとその兄弟アンデレ、ヤコブとヨハネはガリラヤ出身のもと漁師たちです。シモンは、イエスさまからペトロ(岩)と名付けられましたが、それは彼が弟子を代表して、イエスさまへの信仰を告白したからです(マタイ16：18)。またヤコブとヨハネは「雷の子ら」と名付けられています。これは彼らのすぐにカッとなって怒り出す、激しい性格から来ています。イエスさまたち一行がサマリアを通った時の話です。町の人々がイエスさまを歓迎しなかったので、この二人は頭にきて「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、

彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言ったのです（ルカ 9：54）。イエスさまはもちろん彼らのこと戒められました。

フィリポとバルトロマイについてはよく分かっていません。フィリポは、シモンとアンデレと同じ町の出身で、早くからイエスさまに従い、ナタナエルを導いた人物です（ヨハネ 1：45 以下）。バルトロマイはフィリポと並んで名前が上げられていることから、先に上げたナタナエルと同一視されることもあります。彼らもまたガリラヤ出身でした。

マタイの元の職業は、徴税人でした。徴税人とは、ローマの手先となって同胞から税を取り立てるため、人びとから忌み嫌われ、罪びとの代表であり、売国奴と見なされていました。彼はカファルナウムの町の収税所にいる時、通りかかったイエスさまに呼ばれ、弟子として従ったのです。また罪びとの仲間たちを招いて、イエスさまのために大宴会を開きました。このマタイとは真逆の立場にあったのが、熱心党のシモンです。この熱心党というというのはローマからの独立を主張し、そのためには武力行使も辞さないという、今でいえば民族主義者、過激派、テロリスト集団でした。

トマスは双子でした。イエスさまが復活された時、彼は自分の目で見なければ信じないと言い張った、疑い深く、頭の固い、頑固な人物でした。アルファイの子ヤコブとタダイも、フィリポやバルトロマイ、トマス同様に、以前の経歴はよく分かっていません。ただヤコブは、もう一人のヤコブと区別して、年少という意味で、小ヤコブと呼ばれていました。タダイは、伝承によると、小ヤコブの兄弟だったと言われています。

最後に、イスカリオテのユダの名前が記されています。他の弟子たちがガリラヤの辺境出身であったのに対して、ユダだけはユダヤ地方の、いわば中央の出身でした。イエスさまたち一行の財布をあずかり、会計の仕事をしていたことから、有能で、学識もあったと考えられます。しかしこのユダが、名前に続いて記されているようにイエスさまを裏切って、銀貨 30 枚で祭司長たちにイエスさまを売り渡した人物でした。イエスさまがこれと選んだ十二人に、この裏切者のユダも入っていたのです。

こうして見てみても分かるように、イエスさまが、なぜこのような人々を、12人使徒として選ばれたのか、考えれば考えるほど、わたしたちには謎であるのです。ただ分かることは、イエスさまが選ばれるのには、知恵があるとか、能力があるとか、政治的な立場がどうか、そういうのとは全く無関係であるということです。イエスさまによる、わたしたちの選びもそうです。使徒パウロが、コリントの信徒への手紙一の中で、主の召しと選びについて次のように言っています。「兄弟たち、あなたがたが召されたときのことを、思い起こしてみなさい。人間的に見て知恵のある者が多かったわけではなく、能力のある者や、家柄の良い者が多かったわけでもありません。ところが、神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、

力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選びました。また、神は地位ある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それはだれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです。」（1：26以下）

イエスさまによって選ばれていることは、わたしたちを傲慢にすることはしないのです。というのも、わたしたちの中に選ばれるのに何かふさわしい資格や能力があるのではないからです。わたしたちは何もありません。ただイエスさまが、神さまとの祈りの交わりの中で、わたしたちを選び、召してくださったのです。そこには、ただイエスさまの、神さまの、わたしたちに対する限りない愛と憐れみがあるだけです。しかし、だからこそこの選びには間違いはないのです。イエスさまの選びは、神さまの、普通の、わたしたちに対する深い愛と憐れみを表しているのです。

イエスさまが十二人を選び、使徒として任命したのには明確な目的があったのです。十二という数は、イスラエルの十二部族を象徴しています。また「任命する」という言葉には「つくる」という意味があります。イエスさまは、十二人の使徒たちを、新しい神の民、新しいイスラエル、新しい信仰の共同体として創造なされたのです。実際に、イエスさまの復活の後に、この十二使徒たちが、イエスさまの教会のいしずえとなったのです。教会は「使徒や預言者という土台の上に建てられて」（エフェソ2：20）と言われている通りです。

イエスさまが十二人を選ばれ、使徒として任命された目的として、14節後半に「彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、悪霊を追い出す権能を持たせるため」であったとあります。イエスさまは、第一に御自分のそばに置くために十二人を選ばれたのです。イエスさまが十二人を選ばれた第一の目的は、自分の宣教の手段とすることではなかったのです。イエスさまの選びの目的は、わたしたちをイエスさまのそばにおらせ、イエスさまとの交わりに生きることにあるのです。そうしてイエスさまの愛を、わたしたちが受け入れ、その愛に留まることができるように、イエスさまはわたしたちを選んで、そばに置かれるのです。イエスさまのそば近くで、わたしたちはイエスさまに似た者へと新しく創造され、イエスさまを心から愛する者へと変えられるのです。こうしてわたしたちはまた、イエスさまの愛を受けた者として、その愛に押し出されて出て行って、すべての民に、イエスさまを証しし、その愛を宣べ伝える者として遣わされるのです。わたしたちが宣教に赴くどこへでも、イエスさまはいつもわたしたちと共に居てくださって、またわたしたちをそばに置いてくださるのです。